

## ◎ 目でも陶酔できる「ウイスキーボトル」展

公益財団法人 横山美術館 館長 鈴木 俊昭

### はじめに

アメリカが最も輝いていた 1950 年代には、ケンタッキー州を中心に 50 社以上のウイスキー蒸留所があり、競い合って製造していた。アメリカではホームバーを持つ家庭が多く、デカンターに好みの酒を入れて、皆の集まるパーティーの際にはそれで酒を酌み交わし、棚に飾って鑑賞するインテリアとしても楽しんだのである。

ウイスキーメーカーがしのぎを削って企画・発注したウイスキーボトルのデカンターは、輸出用の陶磁器製の置物「セト・ノベルティ」をつくる技術を応用し、多くが瀬戸で制作された。細部にまで表現の行き届いた写実的な装飾品としての地位を確立させ、現在でもコレクターの間で人気の高いアイテムとなっている。題材はカウボーイや独立戦争、野生動物、偉人、銀幕のスター、自動車など多岐に渡り、どこがボトルの栓なのか分からないほど巧みな造形である。ウイスキーは酒であると同時に、政治、経済、文化であるとも云われている。日本でつくられた陶磁器製のウイスキーボトルは、古き良き時代のアメリカを映していると云えるのである。



上：当時人気のエルビス・プレスリーのボトル

左：陶磁器製インディアンが入ったウイスキーセット

### 陶磁器製ウイスキーボトルの製造

ウイスキーボトルは、当初、シンプルなガラス製、また食器タイプのジャグのような物が作られていたが、その後、市場がより装飾性の高いボトルを求めるようになり、次第に細部に拘った写実的なデカンターとしても使えるウイスキーボトルへと変化していった。

ウイスキーボトルの製造には、原型の制作から加飾まで瀬戸のノベルティの製造技術が活かされた。成型方法もノベルティと同様の鋳込み成型法が用いられた。この方法は、成型に時間が掛かり能率の悪い短所はあるが、均一な肉厚の複雑な形状の成型や少量生産の限定ボトルを作るのには適した方法である。

しかしながらウイスキーボトルの製造には、一般的なノベルティと異なり難しい問題点があった。

- ① 決められた内容量になるように原型を制作する必要があった事。一般的に酒の容量は 700ml～760ml であり、原型師は、経験と勘で原型をつくり、容量の過不足は、あとで目に付かない所で修正した。
- ② 必ず栓が必要であり、造形面での制約がある事。原型師は、なるべく栓がどこにあるか一見しても判らないよう工夫をこらした。
- ③ ウイスキーが漏れないようボトルの内面には釉薬が施され、また、亀裂やピンホールが無いように品質管理を厳重に行う事。このようにして優れた日本の陶磁器製造技術が活かされたウイスキーボトルが瀬戸を中心に制作されたのである。



一見した所では分からない、巧みな栓の造形

### ウイスキーボトルの種類

日本陶磁器意匠センターに保管されている意匠認証申請書から輸出された陶磁器製ウイスキーボトルの流れを探ってみた。輸出陶磁器の分類でウイスキーボトルとして認証申請されたボトルの種類は約2,500種で、更にボトルの分類ではなく、ノベルティとして輸出されたものも多く、驚くほど多くの種類のボトルが制作された事が判る。陶磁器製ウイスキーボトルは、アメリカの酒造会社が販売促進の為、限定ボトルを企画し、酒とセットで販売されたものや、観光地の土産物として作られたものも多く、人物、動物、花、鳥、船、自動車など様々な種類があり、その多くはアメリカを象徴するテーマや流行を取り入れた物である。ホームパーティーなどで友人、知人を自宅に招待して飲食を共にする機会が多いアメリカでは、様々な意匠を凝らしたウイスキーボトルは、パーティーで話題を集めた事と思われる。1950年代からのアメリカでは、経済発展により人々の生活が豊かになり、飲酒と共に美しく、楽しい、そして収集する楽しみを満たしてくれる陶磁器製のウイスキーボトルが大流行したのである。これらは、「ノベルティ・ボトル」と呼ばれ、蒐集家の人気アイテムとなり、現在でもその人気は衰えるどころかますます高まってきている。



上：動物シリーズの中でも犬は特に人気が高かった

左：当時人気のマリリン・モンロー 映画「七年目の浮気」より

## おわりに

アメリカに輸出された日本製のウイスキーボトルには、その商品の特性上、裏印が無く原産地、メーカー名の特定が出来ない。そのため、これらが日本でつくられたものであるとの特定が困難である事が多いが、意匠認証には、製造メーカー名が明記されており、多くの素晴らしい完成度のウイスキーボトルが日本製である事が証明されている。

アメリカの人々を魅了した、日本製のウイスキーボトルは、現在では殆ど生産されておらず、わずかに、国産ウイスキーの干支等の記念ボトルが少量つくられているだけとなってしまった。2次元の写真やデザイン画から3次元の立体物をつくる技術、内容量に合わせて形をつくる技術、容器としての機能を持たせる技術、これらの日本のものづくりの技は、残念ながら後世に引き継ぐ事が十分にできずに消えようとしている。これらのウイスキーボトルを見て、素晴らしい日本のものづくりの技を再認識し、新たな陶磁器を生み出すきっかけが出来ればと願うばかりである。

横山美術館では、現在「目でも陶酔できる ウイスキーボトル展」を開催中です。

### 【展覧会情報】

企画展： 目でも陶酔できる ウイスキーボトル展

会 期： 2020年11月7日(土)～2021年2月28日(日)

会 場： 公益財団法人 横山美術館 (<https://www.yokoyama-art-museum.or.jp/>)

名古屋市東区葵 1-1-21 TEL: 052-931-0006

開館時間： 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日： 月曜日(祝・休日の場合は翌平日)

入館料： 一般1,000円、シニア・高・大生800円

【ギャラリートーク】 当学芸員による作品解説

日時: 2021年1月16日(土)、2月6日(土)、2月20日(土)

いずれも13時30分より1時間程度

場所: 美術館展示室(1階ロビーに集合)

\*事前申込不要、要入館料

